



発行日 令和6年9月10日
 発行元 大山崎ふるさとガイドの会(OFG)
 発行責任者 吉岡 望
 連絡先 大山崎町歴史資料館内
 TEL 075 (952) 6288, FAX 075 (952) 6289
 URL <https://www.kyoto-ofg.org/>



「大山崎の字の由来・伝承」の
小冊子刊行について

大山崎町文化協会会長 田中俊裕

この度「大山崎町の字の由来・伝承」について小冊子を刊行することとなりました。それは当協会の広報誌「文化協会だより」に2000年度より16年間、15回に渡り連載しました「我が町の字について」を編集したものです。

その文章の中に「古老の話によると」と度々出てきます。それは当協会が主催して、1995年から11年間で約26名の古老や重鎮の方々から十数回集まって、話をし、文章に書き起こしたものが元になっています。大変苦労されたかと伺っております。

また「字」のいわれや口伝は、主に土地の古老の話を中心に聞取りをしています。そのほか、京都新聞社の『乙訓地名物語』、平凡社『京都府の地名』、角川書店『京都府地名大辞典』、乙訓郡誌編纂会『乙訓郡誌』、『大山崎町史』、等を参照し、記載しています。

沢山の「字」についての本がありますが、古老の話を直接聞いたり、現地を調べたりした本は、少ないのではと思います。そこには、編集された先輩や古老の方々の「大山崎町についての思い」が詰まっているように感じています。

「我が町の字」について実際まとめられたのは、松本様を中心として谷口様・小原様と伺っております。特に松本様は、「大山崎町」の歴史・文化にとどまらず、町の池に住んでいる魚の種類・数まで調べて、ご存知であったと聞いています。

この小冊子をきっかけにして、「温故知新」先ずは古きを知ることによって探ってみてはいかがでしょうか。

私は、以前「門田」に住んでいたため、この冊子29ページの小字「門田・土辺・宝本」について考えてみたいと思います。

門田は、前田と同じく屋敷の正面の田で、他の田よりも重視せられ、苗代田にしたり、その田からとったモチ米で正月のモチをついたりしたという。(『地名語源辞

典』) または豪族の屋敷の門前にある田をいうが、ただ隣接する「土辺」からは大変珍しい「方(頼)杖を持った家型埴輪」や多数の墓等が出土しているし、大山崎町体育館の辺りは水に浸からないそうなので、昔は、この辺りは有力者(豪族)が住むのに適していたのかも知れない。また、古老の話によると「昔は杵を天日で干すので屋敷と同面積位の広場を持っていたが、これを「カドカド」とか「カド」と言っていた」そうで、ここに由来する地名のようである。門田を「かどだ」と呼ぶ人も居る。また、門田は「つだ(津田)」とも呼ばれていたそうである。

土辺については、『日本地名語辞典』によると、「ツチ(土)はツジ(津道)で港に行く道筋」とある。近くに在った泥川浜(港)へ行く道筋か、そのあたり(辺り)ということに付いた地名かもしれない。もし、そうだとすると、隣の門田をツダ(津田)と呼ぶのに関連している様にも思える。なお土辺は古くから「つつべ」と呼ばれているが、町の住民票示としては新しい時代に付けた呼び名を採用しているの「つつべ」としているとのこと。「どべ」と呼ぶ人も居るが、一般的では無さそうである。

「宝本の西端の第二浄水場の辺りに立派な屋敷が在り金持ちの人ばかり居たと、親父が言っていた。それに由来するのが宝本という地名ではなかるうか」との古老の話もあるが、比較的最近の事様なので、ずっと昔、門田や土辺の辺りに居たかも知れない有力者に関連させて考えた方が良さそうである。



「大山崎ふるさとガイドの会」の皆様が町の「文化」・「歴史」を町内外に対して、広めて頂いていることに感謝しております。またこの小冊子が、「大山崎ふるさとガイドの会」の皆様のご活躍にお役に立てば幸いと存じます。

7月～8月の活動実績				2. 行事予定			
1. 主なガイド	7月4日(木)	シニア自然大学校 森と海の自然科	21名	9月17日(火)	あちこち山歩 77	「天王山～柳谷観音」	
	7月7日(日)	茶道石州流浮瓢会高松	21名	9月26日(木)	学習会	「下水道事業の概要」	
	7月14日(日)	埴輪の会	9名	9月30日(月)	あちこち山歩 78	「宇佐山城跡」	
2. 会の行事など	7月12日(金)	京都府ガイド協議会の総会、交流会 (会長出席)		10月17日(木)	現地見学会	「淀川資料館」「鍵谷」等	
活動予定				○ 大山崎町歴史資料館	10月26日(土)～12月1日(日)	第32回企画展 「宝積寺1300年—その信仰のかたち—」	
1. 主なガイド	10月26日(土)	秋の天王山ウォーキング 2024	全班	○ アサヒグループ大山崎山荘美術館	9月15日(日)～12月8日(日)	(途中一部展示替え有り) 「丸沼芸術の森所蔵 アンドリュー・ワイエス展 —追憶の オルソン・ハウス」	
	10月5日(土)～12月1日(日)	の土・日・祝 秋の定点ガイド	全班				

7-8月 ガイド実績											
	一般ガイド		主催ガイド		歴史資料館		出前ガイド		定点ガイド		合計
7-8月	3件	49人	0件	0人	35件	77人	0件	0人	0件	0人	38件 126人
6年度累計	13件	199人	2件	100人	150件	318人	0件	0人	310件	1158人	475件 1775人

あちこち学習山歩 76 高槻細発見

6月11日(火)、梅雨入り前の晴天にも恵まれ、18名が「高槻細発見」に参加しました。

戦国から明治の初めまで現存した高槻城ですが、往時を偲べるのは町割りや街道に残るわずかな歴史の痕跡だけと言えるかも知れません。

北大手門跡を皮切りに、現代では生活道路と化した堀跡の道を、東へ南へとクルクル歩きながら、想像を膨らませます。参勤交代の行列が通った町並み、京や西国、淀の河港、商都大坂、寺内町富田へと、大山崎同様、高槻が重要な交通の要衝であったことが分かります。

キリシタン大名として知られる高山右近の記念聖堂では、高槻時代の話や福者に選ばれた経緯などを伺い、歴史民俗資料館では解説を聞きながら、懐かしい商家の土間を吹き抜ける風に、ひと時の涼を得ました。次に城下から西国街道の宿場町「芥川宿」へ向かいます。

一里塚跡、30軒を超える旅籠が並んでいた古い町

並みを歩き、いよいよ「山崎合戦」で秀吉が前日の陣を敷いた天神の馬場へ。上宮天満宮から見下ろした馬場を埋め尽くす数万の兵士たちのざわめきや興奮を感じようと、想像の一刻を楽しみました。

大山崎と島本、高槻は、西国街道と淀川を通じて過去から現代まで、歴史的なつながりや交流が盛んでした。これからも少し広い視点で地域を楽しみたいと感じた一日でした。(3班 市原寛之 記)



高槻本陣跡



天神の馬場

～わたしのふるさと～

私の故郷は愛媛県今治市で「タオル」「造船」「しまなみ海道」で良く知られています。

愛媛の名は神話にも登場する愛比売(美しい乙女)からの当て字です。

今治の由来は関ヶ原の合戦後、「築城三名人」の一人と称された藤堂高虎が徳川家康からこの地方を授けられ「これからこの地を治める」の意で今治と名付けたと言われています。もともとは、「いまはる、いまはり、いまばる」と様々な呼び方がありましたが、大正時代に現在の「いまばり」に統一されました。

町のはずれに聳え立つ今治城は「吹揚城」の別名があり“砂が吹き上げられてできた浜”であった事が由来です。この城は海賊取り締まりの海城として築城され堀は海水で満たされフグ、ベラ等の海水魚が泳いでいます。

是非美しい国、愛媛を訪ねて瀬戸内海の海鮮料理を召し上がって下さい。

(1班 池内 泉 記)

私の故郷は兵庫県養父市大屋町です。山間で実家は農家でした。昨年、同郷の妻の実家で法要があり、菩提寺(蓮華寺)の歴史好き住職から昔話を聞きました。

羽柴秀長の但馬征伐で藤堂高虎が小代谷を攻めた時、毛利方の猛反撃で敗走し大屋谷で土豪栃尾加賀守祐善に援けられ、その後栃尾一族が加勢し勝利したといひます。

お寺は藤堂高虎が築いた栃尾谷城址(栃尾姓多く、地名も栃尾)で、彼が築かせた野面積の石垣が今も残り、周辺に藤堂ゆかりの地があり、住職は当家との関りは不明とのことでしたが我がルートではと心が躍りました。知人も少なくなりましたが、久々に帰省して歴史話を聞くと懐かしく思えた一日でした。



蓮華寺

(2班 栃尾 勉 記)

ご存じですか <背割堤>

桂川と宇治川、宇治川と木津川の合流箇所には川の水がスムーズに流れるように導流堤防が造られています。これを背割堤と言います。

背割堤防は明治時代に造られました。木津川、宇治川、桂川が合流する現在の形は明治3年に木津川の付け替え工事が竣工し、明治29年～43年にかけての淀川改良工事と、大正7年～昭和5年にかけての淀川改良増補工事で人工的に築造されたものです。

昭和37年頃までの背割堤は手入れされていて、雑木はほとんどありませんでした。現在は自然保護の観点から雑木が放置され洪水時の流水の障害が懸念されます。

また昭和40年頃までの宇治川と木津川の背割堤防は松の木が多く並んでいて、あたかも天の橋立のようでした。多くの時代劇映画の撮影場所にもなっていました。その後松食い虫で枯死したので、桜の木が植えられ今では桜の名所になっています。



背割堤

*この記事は元会員の山田 勇氏がOFGだより第84号(平成20年11月20日発行)に執筆されたものです。